

この際に採集したものである。

Neocordyceps kohyasanensis はツルリンドウの未熟の果実につくもので、果実寄生菌としては第2の新種である。*Filoboletus mycenoides* はニューギニア、ジャワ産であるが、この熱帯産の菌が寒い竜神で発見されたことは分布上から興味がある。第5種は残念ながら胞子が形成されて居らなかった。恐らく担子菌類の子実体と思われる。

○北海道植物新産地報告(2) (伊藤浩司) Koji ITO: New localities of Hokkaido plants (2)* **

4) チシママツバイ *Eleocharis acicularis* (L.) Roem. et Scult. マツバイの刺針の退化型がマツバイの母変種、すなわちチシママツバイということである。既刊の植物誌によるとチシママツバイは四国地方に産することになっている。先日、北海道中部の芦別市滝里の水湿地で採集したマツバイを見たら、これが全く刺針を欠く型でチシママツバイということになった。もっと探せば道内あちらこちらに生育していることであろう。

5) チシマヒメドクサ *Equisetum variegatum* Schleich. 富山大学の小島覚氏が道東の十勝川上流域でチシマヒメドクサを採集され、道内の分布を示された(植物地理, 分類研究 29: 28, 1981)。一方、筆者は芦別市滝里の空知川中流域の河畔岩盤上や、ヤナギ林の下に生育しているチシマヒメドクサを確認している。これまでの知見を総合すると、チシマヒメドクサは北海道では石狩川、空知川、十勝川から日高沙流川流域に及んでいることがわかる。興味あることに、これらの諸川の源頭部は中央高地か日高山脈の北端(沙流川)にあり、地理的にそうへだたっていない。

6) セイヨウオオバコ *Plantago major* L. (図1) セイヨウオオバコが我が国に帰化定着していることは既に述べられている(長田武正: 原色日本帰化植物図鑑 p. 95, 1976)。しかし、その実際の帰化状態はあまりよくわかっていない。セイヨウオオバコは蒴(蓋)果当り種子数がオオバコより多いばかりでなく、種子の形態や表面紋様も明らかに違っており、しかも染色体数はセイヨウオオバコで $2n=12$, オオバコで $2n=24$ で、それらが良い決め手となる。種子数を目安にして北海道のオオバコとセイヨウオオバコの分布状況を見ると、予想外にセイヨウオオバコが多く、所によってはオオバコの方がむしろ珍しい。また種子数からみるとイソオオバコ (*Plantago togashii* Miyabe et Tatewaki) はむしろセイヨウオオバコに近い。

* 北海道大学農学部植物標本室業績。Contribution from SAPT (Fac. Agr. Hokkaido Univ.).

** 本誌 57: 376 (1982) から続く。

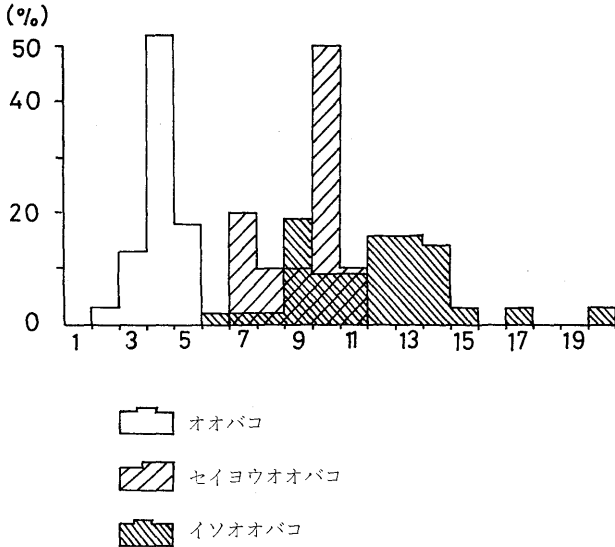


図 1. 3種のオオバコの蒴果当り種子数の出現割合 (松尾 未発表資料による)

7) 3数性のクルマバツクパネソウと 4弁のオオバナノエンレイソウ *Trimerous Paris verticillata* and 4-tepaled *Trillium kamtschaticum* ツクパネソウ属やエンレイソウ属にみられる畸形例は旧く松田孫治氏 (植及動 3: 643-644, 1935) の報告がある。エンレイソウ属では花葉の3数性が4数性に変化し、ツクパネソウ属では反対に4数性が3数性に変化する。芦別市滝里 野花南トンネル付近山地の落葉広葉樹林下にクルマバツクパネソウの一群が見られるが、正常の集団の中に3数性の個体からなる小集団が発達している。1979~1980年の観察ではこの集団の崩壊は見られない。同様な例は最近 (1983年6月) 網走湖呼人半島北岸の広葉樹林下でも認められた。

最近発行された写真集 根釧原野 (長谷川幸一・岩松健二 1983) の一シーン、道東地方のオオバナノエンレイソウ群落の写真を見ると、中央最前面の1個体が明らかに十字状に4弁をつけている。しかし葉の数は正常のオオバナノエンレイソウのように3葉である。筆者はしばしば4葉のエンレイソウ植物を見るが、4弁のエンレイソウ植物を見たことがない。

(北海道大学大学院 環境科学研究科)